NPT再検討会議・ニューヨーク行動を終えて

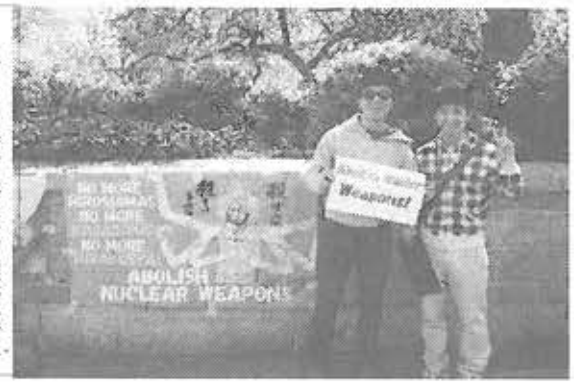
京都外国語大学3回生　阿比留高広

私は今回4月の終わりに5日ほどNYに滞在してきました。まず現地で感じたことは、核兵器をなくしたいと願う人たちは日本にだけではない、世界中にいるということでした。さらに、その人たちの多くは、核兵器をなくすことと自体が目的というよりも、自分たちの求めていることの邪魔になっているものの一つが核兵器であり、だからなくさないといけないと感じているようでした。特に印象に残ったのが、核兵器に毎年莫大な税金を使っている一方で、学費や福祉面には冷たいという政府の姿勢自体に異議を唱えている現地の学生でした。日本と変わらない、いやそれ以上の資本大国、貧困と格差、競争大国のアメリカでも声をあげて懸命に努力している人たちの姿でした。現地のある方が、核兵器賛成派の意見は抑止力という一つだけなのに対し、反対派の理由は数えきれないという時点でどちらに大義があるかは明白だといっていましたが、全くその通りだと思います。

今回自分は現地のマーシー大学に被ばく者の花垣ルミさんという方と行ってきました。

マーシー大学では、ルミさんが被ばく証言をしました。彼女の話も印象深かったのですが、なによりも今回驚いたのが、マーシー大学に聞きに来ていた十歳前後の生徒さんたちの反応でした。話を真剣に聞いてくれていたのは言うまでもなく、その後の質問タイムでは一気にたくさん手があがり、結局多くが質問できず終わってしまうほどの勢いでした。単純に恥ずかしがる日本人との違いもあるのでしょうが、被ばくというものが一体何なのかを真剣に知りたがっている雰囲気が感じられました。さらに、彼らはルミさんの証言だけでなく、日本の自然や文化にも興味津々でした。楽しく日本の文化紹介もしつつ、被ばく当時の悲劇にも真剣に耳を傾けるヤングアメリカンには驚かされたし、本当に誇らしいというか、偉大な雰囲気を感じました。その後のルミさんの折り鶴などのプレゼントにも、そんなにかというほど大はしゃぎなし生徒たちを見ていると、政治の上で、歴史の上では対立していたとしても、市民レベルでの交流にその対立を持ち込むことがほんとうにバカらしく思えてきました。時の情勢がどんなに暗いものでも、本当の被ばくの実態を若い世代に伝えていくことをやめなければ、必ず将来核兵器をゼロにする希望があることを確信させる、興味深い、おもしろい会合になりました。

私たちがこれから引き継ぎ、やっていかなくてはいけないことは、被ばく者の証言を日本中に、そして世界中に広げていくことだと思います。被ばく者たちは未だに多くが自らの被ばく体験を語ろうとはしません。しかし、それを今次の世代に渡していかないといけない被ばく者がもだんだんと増えています。なぜなのか。自らの被ばく体験を真剣に聞いてくれる他国の若者の前の本当にうれしそうな、安心しているような花垣さんの笑顔は何を伝えているのか。それが核兵器をなくさないといけないという原点だと自分は思います。



署名の時阿修羅の横断幕にひかれてシンガポールから来た人が署名してくれた後に一緒に撮った写真

マーシー大学（NY郊外の大学）での花垣さんの証言の後の質問タイム

最後に、実際にNYまで行ってこういう経験ができたのも多くの皆さんにカンパをもらい、支えていただいたからということは間違いないと思っています。本当にありがとうございました。

書籍の紹介と書評

乙訓平和委員会
米重節男

2013年10月27日に京都平和委員会が舞鶴で開いた「京都平和のつどい」で著者の内藤功弁護士（日本平和員会代表理事）の講演で聞いた時に紹介された本です。会場で買い求めて読んだ書評を、乙訓平和委員会ニュースNo.176号（2013年11月5日発行）に書いたものです。本には砂川事件についての裁判闘争が語られていますので、今の「戦争法案」の議論の状況の中では、この本が出番と思いました。

『「憲法九条裁判闘争史」その意味をどう捉え、どう活かすか』（内藤功、聞き手／中谷雄一・川口創　かもがわ出版　3000円＋税）

この本は、日本平和委員会代表委員の内藤功弁護士から、憲法九条を武器に軍事基地反対闘争を裁判で闘った経験を、若手の弁護士が聞き取る形式で語られた裁判闘争史で、読みやすく臨場感あふれる内容です。評者は、内藤功さんと言えば弁護士で日本共産党の参議院議員だったことくらいしか、思い至らなかったのですが、総評労働弁護団の中心的メンバーで労働分野でも多くの裁判闘争をされていたと知りました。

この本を読んで、すごい闘いをしてきた人だと感じました。その根底に、戦前に職業軍人の道を歩もうとその一員であったという自身の戦争責任への反省があると語られています。今の状況の中で、憲法を武器に闘うことと、今の力関係の中でそのことの重みを知らされた思いです。国会内だけを見れば表面的には展望が無いような状況も、憲法を武器に闘うことで切り開けるという確信を得るものです。ぜひ一読されることをお勧めします。

（事務局より）
2015年NPTニューヨーク行動に青年会員阿比留高広君を送り出し、被爆者の花垣ルミさんとも行動を共にし、多くのことを吸収して帰ってきました。多くの皆さんからのカンパに心からの感謝を申し上げます。